Ulysses における作者・語り手・登場人物(1)
——テレマコス——

小田井　勝　彦

Stately, plump Buck Mulligan came from the stairhead, bearing a bowl of lather on which a mirror and a razor lay crossed.[1] (1.1-2)

ジェイムズ・ジョイス(James Joyce)の代表作『ユリシーズ』(*Ulysses*)の分厚い一冊は，登場人物の一人バック・マリガン(Buck Mulligan)が，彼の住む塔の屋上に現われる，この一文により幕を開ける。

ところで，改めて言うまでもないことだが，『ユリシーズ』はスティーブン・ディーダラス(Stephen Dedalus)，レオポルド・ブルーム(Leopold Bloom)，モリー・ブルーム(Molly Bloom)という三人の主人公が中心となり，彼らの一日の出来事，意識の流れが綴られている作品であると要約できる。その作品全体の枠組みの中で，この最初の一文が意味するものは何なのであろうか。なぜ主要とは言いがたいマリガンの登場が最初の一文なのであろうか。小説の中の時刻も同じで，対比して書かれていると言われる第四挿話が，"Mr Leopold Bloom ate with relish the inner organs of beasts and fowls." (4.1)というように，主人公の一人の氏名で始まり彼の頭の中の想像を綴っていることを考え合わせた時，その疑問は強まるのではないだろうか。

私は，「マリガンの登場で始まるのはなぜか」を考えることによって，ジョイスが第一挿話で登場人物をどう扱っているのかが明らかになるのではないかと考えた。本稿では，〈1〉で語り手の登場人物に対する扱い方，

〈2〉〈3〉で心理描写，〈4〉ではスティーブンとマリガンの関係を考察する。それにより，この挿話の枠組み，そして作品全体におけるこの挿話の持つ意味を明らかにしていきたいと思う。

〈1〉

まず，語り手が登場人物をどう扱っているのか，描いているかを考察していくことにする。

Van Caspel は，この小説のまさに最初の一語 "Stately" に注目して，"some readers may think, he [Buck Mulligan] is not a stately fellow, he merely now walks in a stately manner.[2)]" と述べている。この叙述に続いて彼は，"Stately" という語のように –ly で終わる形容詞は通常副詞形がなく(OED第二版[3)]にはきちんと副詞形もでているが)，文法的には「威厳のある(マリガン)」という解釈になってしまうと述べている。そして，"... a solid man, Buck Mulligan, heralded by the adjectives 'Stately, plump[4)]'" と述べた Ellmann に対し，マリガンは「威厳のある人物」ではなく，その場での彼の流儀なのだと異議を申し立てているのである。

Van Caspel も述べているのであるが，この最初の一語にすでに解釈の困難性があるのである。そもそも "stately" という語を OED で引くと，形容詞の一番目の定義は次のようなものである。

> A. adj. 1. a. Of personal appearance or demeanour, and of person with reference to these. In early use, *Befitting or indicating high estate, princely, noble, majestic.* In later use, Imposingly dignified.[5)]
> (イタリックは筆者)

マリガンは，この語が元々使われる対象であった貴族や王族では全くないし，後で詳しく考察するが，Caspel が述べたようにマリガンは貴族や

王族に譬えられるような「高貴」でも，「高潔」でも，「威厳がある」人物でもないと言えよう。したがってこの語は，副詞として挙がっている(Caspel も使っているが)"in a stately manner" という定義にあてはまり，マリガンが装っている流儀を表したものであると言えよう。

しかしながら，問題はそれだけではないのではないだろうか。流儀であるならば，「気取って」(affectedly)，「偉そうに」(haughtily)，「儀式ばって」(ceremoniously)など，バック・マリガンにとってより否定的なイメージの言葉が使用されていてもよいのである。それなのになぜ語り手は，マリガンの流儀として，"stately" という貴族や王族に対して使うような語を使ったのであろうか。それは，最初の一文だけで解決するはずのないものである。語り手は，どのような修飾語をマリガンに対して使っているのか，挿話全体を見渡してみることにする。

まず，第二文 "A yellow dressinggown, ungirdled, was sustained *gently* behind him on the mild morning air." (1.2-4，イタリックは筆者)である。この文中において "gently" は，日本語にすれば「やさしく」「そっと」くらいの意味であろう。しかしながら当然この語は，家柄の良さと関係する語であり，OED の一番目の定義は "As befits one of gentle birth ; generously, nobly, courteously ; elegantly.[6]" となっている。最初の文の "Stately" と第二文の "gently" とを考え合わせてみると，やはり貴族や王族に対して使うような高貴さや威厳を表わす語をマリガンに対して使っているという仮説が立てられるのではないだろうか。さらに読み進めていくと，やはり同様の傾向が見受けられる。

> *Solemnly* he came forward and mounted the round gunrest. He faced about and blessed *gravely* thrice the tower, the surrounding land and the awaking mountains. (1.9-11，イタリックは筆者)

-- Back to barracks! he said *sternly*. (1.19, イタリックは筆者)

スティーブンと会話を始める(1.34)までのこの冒頭のシーンは，ミサを模倣したものであり，司祭者はマリガンである。それゆえにこれまで見てきたような副詞が使われていると考えることもできよう。語り手は，彼の容姿を映した影を次のように描写する。

The plump shadowed face and sullen oval jowl recalled *a prelate,* patron of arts in the middle ages. (1.31-33, イタリックは筆者)

この部分から明らかであるように，語り手はマリガンを高位聖職者として扱っているのである。しかしながら Gifford が指摘するように，彼が行なっているミサの模倣は異端的なものであり，「帯のほどけた下品な装い」(1.2-3)や「むっつりした楕円形のあご」「かみそり」は，高位聖職者のイメージとしては似つかわしくないことは言うまでもない[7]。それにも拘らず語り手は，そのような修飾語を付与しているのである。

では，スティーブンと会話を始めた後の描写はどうなのであろうか。まず彼は陽気であり，"gaily" (1.34)，"pleasantly" (1.379)など快活さを表す副詞が，マリガンに対しては採用されているのである。このマリガンの快活さのイメージは，修飾語だけではなく，"A flush which made him seem younger and more engaging rose to Buck Mulligan's cheek." (1.200-201)などの一文により，明らかに言明され強調されているものであるし，

Buck Mulligan at once put on a blithe broadly smiling face. He looked at them, his wellshaped mouth open happily, his eyes, from which *he had suddenly withdrawn all shrewd sense,* blink-

ing with mad gaiety. He moved a doll's head to and fro, the brims of his Panama hat quivering, and began to chant in a quiet happy foolish voice. (1.579–583, イタリックは筆者)

にあるように，狡猾さをすべて振り捨てて，満面の笑みと陽気さで歌を歌う人物なのである。

さらに言葉の内容はどうであれ，スティーブンに対して話しかけるマリガンの姿は，"in friendly jest" (1.35)，"frankly" (1.51)，"kindly" (1.150)，"blandly" (1.472)，"with warmth of tone" (1.485–486) など友好的であることを示す副詞(句)を用いて表現されているのである。

これまで見てきたことによると，語り手はマリガンをプラスイメージで描いていることがわかるであろう。ではこれに対して，スティーブンはどのように描かれているのであろうか。残念ながらスティーブンは，マリガンと対照的にマイナスイメージで描かれていると言わざるを得ない。寝起きすぐの様子を描写したものであると言えようが，登場のシーンから読者に悪印象を与えるものである。

Stephen Dedalus, *displeased and sleepy,* leaned his arms on the top of the staircase and looked *coldly* at the shaking gurgling face. (1.13–14, イタリックは筆者)

高貴さや威厳を持って塔の屋上に現われ，活き活きとひげそりを行なうマリガンと何と好対照をなすことであろうか。他にも "wearily" (1.36)，"gloomily" (1.90) などもあり，スティーブンは暗く陰鬱なイメージで描かれていると言えそうである。

その中でも特に印象的なのは，マリガンに対するスティーブンの対応であろう。さきほど見たようにマリガンからスティーブンへは友好的であっ

たのだが，スティーブンからマリガンへは上記の“coldly”でもわかるように冷淡なものであり，この挿話の間敵意を剝き出しにしたままである。“with bitterness”(1.145)，“very coldly”(1.217)，“in scornful silence”(1.418)などがその例となるであろう。

マリガンとスティーブンという二人の登場人物を表面的に語り手がどのように扱っているのかを見てきたが，基本的にはマリガンはプラスイメージの言葉で表現されていて，スティーブンはマイナスイメージの言葉で表現されていると言えよう。マリガンに対して，マイナスイメージの言葉が全くないとは言わない。彼も不機嫌になったり，声を荒げたりすることもある。しかし，ずっと陰鬱なイメージを崩そうとしないスティーブンと対比すると，さきほど見たようにすべての狡猾さを捨て陽気に振舞えるマリガンは，読者にはるかに良いイメージを与えるはずである。

また，挿話冒頭の「高貴さ」「威厳」を持ったマリガンのイメージを考えると，スティーブンはそれと正反対の「品位のない」「威厳のない」人物であると考えられる。さらに，“A server of a servant”(1.312)とあるように，スティーブンはマリガンに仕えているイメージであり，仮にマリガンを「王」とするならばスティーブンはそれに従属しながらも謀反を考える反逆者のイメージであると言えるのではないだろうか。

〈2〉

第一挿話のアクションは，マリガンが中心である。スティーブンは，彼に呼ばれて塔の屋上へ上がり，朝食の席に着き，水浴するマリガンに従って海岸まで行く。それだけ見れば，マリガンがこの挿話の主人公であると言えそうであるが，実際はそうではなく，スティーブンが主人公である。それを決定付けているのは「心理描写」であり，スティーブンの心の中の声は描かれているが，マリガンは描かれていないのである。語り手によって語られるアクションをこれまで追ってきたが，〈2〉〈3〉ではこの挿話の

『心理描写』はどうなっているのかを検討し，語り手と心理描写の関係を考えていくことにする。

次の一節が，スティーブンの心の中にあるイメージを写し取った，はっきりとわかる最初のものであるだろう。

> Pain, that was not yet the pain of love, fretted his heart. *Silently, in a dream she had come to him after her death, her wasted body within its loose brown graveclothes giving off an odour of wax and rosewood, her breath, that had bent upon him, mute, reproachful, a faint odour of wetted ashes.* Across the threadbare cuffedge he saw the sea hailed as a great sweet mother by the wellfed voice beside him. The ring of bay and skyline held a dull green mass of liquid. *A bowl of white china had stood beside her deathbed holding the green sluggish bile which she had torn up from her rotting liver by fits of loud groaning vomiting.* (1.102-110，イタリックは筆者)

イタリックにした部分が心の中のイメージ，他は語りによる外面描写である。この場面はマリガンが海に対して "Our mighty mother!" (1.85) と呼びかけ，母親の臨終の場面での出来事について二人で口論になった直後，海を眺めながらの場面である。

この場面の前半の方は，一人称で語られる内的独白ではなく，完全に三人称を用いての語りによる描写であり，後半もスティーブンを表わす代名詞が出てこないので断言はできないが，この説明的な文は内的独白ではないであろう。内的独白ではなく語りによる描写となっていることによって，スティーブンの自由意思とは関わらず，昨晩見た夢が頭の中に蘇ってきてしまっていることを表わす一節となっているのである。

朝起きて始めに想起するのが(少なくとも作品に表れる形では)，母親の臨終

の光景であるというのは，なんと陰惨であることだろうか。この母親の臨終のイメージは，この挿話中(作品全体においても)で繰り返される。

239～241行で屋上を去りながらマリガンは，“Fergus' song”を唄う。そして，その後スティーブンが見ているであろう海の描写がそれに続く。マリガンの唄と母親と結び付けられた海の情景は，スティーブンに再び母親のことを想起させ，249～269行目の内的独白となる。その内容は，母親の臨終の場面で“Fergus' song”を唄ってあげたこと，母親の引き出しの中身と彼女の思い出，パントマイムをみた時のことなどであり，徐々に臨終の場面のイメージから遠ざかっていく。

しかしながら，次の一節が来る。

> In a dream, silently, she had come to him, her wasted body within its loose graveclothes giving off an odour of wax and rosewood, her breath, bent over him with mute secret words, a faint odour of wetted ashes. (1.270-272)

一つ前の引用と同様に，語りによって描かれるスティーブンの心の中のイメージであり，この部分の先頭は一つ前の引用の二番目の文とほぼ同じである。この語りによって繰り返された一文により，折角臨終の場面のイメージから離れていたのに，再び引き戻されることとなり，内的独白となる。

> Her glazing eyes, staring out of death, to shake and bend my soul. On me alone. The ghostcandle to light her agony. Ghostly light on the tortured face. Her hoarse loud breath rattling in horror, while all prayed on their knees. Her eyes on me to strike me down. Liliata rutilantium te confessorum turma circumdet : iubi-

lantium te virginum chorus excipiat.

Ghoul! Chewer of corpses!

No, mother! Let me be and let me live. (1.273-279)

母親が跪いてお祈りするように願ったのに彼はそれを拒んだのだ。マリガンとの会話の内容にはなっていたが，ここで初めて内的独白の形で現われている。この場面について小島基洋氏は，

> He [Stephen] feels remorse of conscience because he refused to pray when his mother was dying. This remorse of conscience is so strong that he changes the pain in his soul —"Agenbite of inwit" into the pain in his body —"Chewer of corpses."[8]

と述べている。つまり "Chewer of corpses"（肉体を蝕むもの）とは，"Agenbite of inwit"（良心の呵責）の代わりであり，それを内的独白でも隠さなければいけないほど，彼は苦しんでいるのである。

102 ～ 105 行そして 270 ～ 272 行で繰り返される語りは，まるで母親の亡霊であるかのように作用し，スティーブンに母親の臨終を思い出させ，彼を苦しめる。語りはスティーブンの味方をしているのでも，中立なものでもなく，彼を絶望の淵へと落とし入れる悪意に満ちた役割を果していることが見て取れるであろう。

〈3〉

母親に対する心理描写を考察することで，語り手の役割が明らかとなった。今度はさらにスティーブンの内的独白が，語り手によって語られている周囲の状況にどう反応しているかを考察していきたい。前にも述べたが，この挿話のアクションはマリガンが中心である。そして，スティーブ

ンの内的独白もそれに対するリアクションであるものがほとんどであり，その点を中心に考察する。

まず，この作品での最初の内的独白もそうである。マリガンに鏡を見るように促され，自分の顔を見つめる。

> Hair on end. As he and others see me. Who chose this face for me? This dogsbody to rid of vermin. It asks me too. (1.136-137)

母親の臨終のイメージもそうであるが，ここでも彼を惨めな考えへと導くのである。そして，スティーブンにとっては，恐怖，脅威を与える者であると言えよう。

後に続く内的独白もそれと同様である。

> Parried again. He fears the lancet of my art as I fear that of his. The cold steel pen. 〈1.152-153〉

これは，自分の言った発言が言い流されたことに対する反応で始まっており，自分の "The cold steel pen" を恐れているのだと想像し，対抗意識をあらわにするのであるが，彼自身が目にしているかみそり(マリガンは医学生なのでメスを暗示している)に対しての恐怖でもあるのだ。この部分は，続いてなされる内的独白，

> Cranly's arm. His arm. (1.159)

> Young shouts of moneyed voices in Clive Kempthorpe's rooms. Palefaces: they hold their ribs with laughter, one clasping another. O, I shall expire! Break the news to her gently, Aubrey!

I shall die! With slit ribbons of his shirt whipping the air he hops and hobbles round the table, with trousers down at heels, chased by Ades of Magdalen with the tailor's shears. A scared calf's face gilded with marmalade. I don't want to be debagged! Don't you play the giddy ox with me!

Shouts from the open window startling evening in the quadrangle. A deaf gardener, aproned, masked with Matthew Arnold's face, pushes his mower on the sombre lawn watching narrowly the dancing motes of grasshalms.

To ourselves .... new paganism .... omphalos. (1.165–176)

の部分をあわせて考えるとよいであろう。一番目の引用は，スティーブンに腕を絡ませ，手を組むことを誘いかけてきたマリガンに対する反応である。スティーブンは，『若い芸術家の肖像』(*A Portrait of the Artist as a Young Man*，以下『肖像』とする)で自分を裏切ったクランリーとマリガンを重ねあわせている。

二番目の引用は，ヘインズ(Haines)に関して "If he makes any noise here I'll bring down Seymour and we'll give him a ragging worse than they gave Clive Kempthorpe." (1.162–164)とマリガンが言ったことに対して，行なう内的独白で，オクスフォードにおける仲間内でのいじめの光景である。スティーブンはオクスフォードには行ったことがないので，Benstock が指摘しているように，マリガンが以前話したことを想像しているのである[9]。

そのいじめをヘインズに行なおうというのがマリガンの誘い掛けであるが，この一節の最後にシン・フェインのスローガンがあることで意味は変わってくる。このいじめは仲間に対して行なわれるもので，スティーブンは自分が仲間(アイルランド人)によっていじめ(暴力)を受けることの恐怖を

感じているのではないだろうか。マリガンからの脅威は，暴力という形になってスティーブンに表われるのである。スローガンの前に耳の聞こえない庭師が出てくることで，Benstock の指摘通り[10]スティーブンはその庭師の立場で，関係したくないということを選択するのであろう。スローガンを聞きたくないし，与したくないのである。

スティーブンはストーリーが進むにつれて，マリガンとの乖離を明らかにしていく。"Why should I bring it down？ Or leave it there all day, forgotten friendship？"（1.306-308），"So I carried the boat of incense then at Clongowes. I am another now and yet the same. A servant too. A server of a servant."（1.311-312）の部分では，"a server of a servant" と現在の立場を結局は受け入れてしまうが，その直前でそれを止めようかと考えているのだ。

マリガンに与しないことの表明は，直接的な形ではなく，間接的な形をとって現れるのである。

> Old and secret she had entered from a morning world, maybe a messenger. She praised the goodness of the milk, pouring it out. Crouching by a patient cow at daybreak in the lush field, a witch on her toadstool, her wrinkled fingers quick at the squirting dugs. They lowed about her whom they knew, dewsilky cattle. Silk of the kine and poor old woman, names given her in old times. A wandering crone, lowly form of an immortal serving her conqueror and her gay betrayer, their common cuckquean, a messenger from the secret morning. To serve or to upbraid, whether he could not tell : but scorned to beg her favour.（1.399-407）

このミルク売りの老婆に対して使われている "Silk of the kine" "poor

old woman" は，Giffordによると "Two traditional epithets for Ireland."[11] となっており，彼女はいわばアイルランドの化身である。いわば彼女こそアイルランドの表象なのである。マリガンは彼女に対して媚を売り，好意を得ようとする。それに対してスティーブンは，アイルランドに媚を売ることを軽蔑する。したがって，マリガンに与することも拒むのである。

そして，これらは挿話後半の乖離の表明へと繋がることになる。

> My familiar, after me, calling, Steeeeeeeeeeeeephen! A wavering line along the path. They will walk on it tonight, coming here in the dark. *He wants that key. It is mine. I paid the rent.* Now I eat his salt bread. Give him the key too. All. He will ask for it. That was in his eyes. (1.628-632，イタリックは筆者)

> I will not sleep here tonight. Home also I cannot go. (1.740-741)

これらも直接的な表明ではない。塔から出て行くこととマリガンに与しないことを重ね合わせているのである。

イタリックにした部分はこれまで議論となってきた部分であり，Van Caspel がそれらをまとめている。[12] それによると，Jones や Tindall, Blamires, Benstock らは，表面上読み取れるように "he" をマリガン，"I" をスティーブンと取り，スティーブンが賃料を払ったと考える。その一方で，Kenner や Goldman は，"It is mine. I paid the rent." の部分はマリガンから言われたことの引用で，スティーブンが支払えるはずはなく，マリガンが払ったと考える。そして Van Caspel は後者を支持している。

私も後者を支持する。マリガンのモデルはゴガティとされているが，

> He [Gogarty] had a fancy for living in towers, and when I first heard of him had the notion of establishing himself at the top of the Round Tower at Clondalkin ; afterwards he rented from the Admiralty the Martello Tower at Sandycove, which presently became the resort of poets and revolutionaries, something between one of the 'Hell-Fire Clubs' of the eighteenth century and the Mermaid Tavern.[13)]

と Eglinton がエッセイで記述しているように，マリガンのモデルであるゴガティがこの塔を借り，スティーブンのモデルであるジョイスがそこを溜まり場とする詩人たちのひとりであったのだ。伝記的な事実とフィクションを必ずしも一緒にしてはいけないが，この小説の特徴の一つであるローカリティを考えると，賃料を支払っているのはマリガンであると考えても良いであろう。

ここまで考察してきたことをまとめよう。マリガンは，スティーブンの内面には脅威であり，恐怖を与える人物として映っている。そして，彼を仲間にしようと(実は従わせようと)するのである。そしてそれに対して抗おうとするのがスティーブンであるが，直接的な攻撃とはなっていない。また，彼が去る塔も元々の持ち主(借り手)に明け渡すだけであろう。ホメロスのオデュセイア(*Odyssey*)では，求婚者たちが居座り，本来の住人であるテレマコス(Telemachus)が出て行くのであるが，それに対して元々の持ち主ですらないとは，なんと惨めな状況にスティーブンはいるのであろう。自己主張となっておらず，劣等感を際立たせた内的独白となっているのである。

〈4〉

さきほど，オデュセイアとの対応を少し述べたが，*Ulysses* はGilbert[14)]

が詳細に述べているように，シェイクスピアの『ハムレット』(*Hamlet*)とも対応関係がある。このことは，ヘインズの "this tower and these cliffs here remind me somehow of Elsinore." (1.566-567)というせりふで仄めかされている。

スティーブンの内的独白に，"God, we'll simply have to dress the character. I want puce gloves and green boots." (1.515-516)とあるように，彼らは劇中人物を演じているのだ。それゆえ，それぞれが演じているものとの対応関係を考えることによって，その類似点，相違点から，ジョイスが意図していることが明らかになるのではないだろうか。スティーブンとマリガンに絞って検討していく。

まず『ハムレット』と彼らとはどのような対応関係にあるのだろうか。マリガンがスティーブンを懐柔しようとすることは，『ハムレット』一幕二場でのクローディアス(Claudius)のふるまいであると言えよう。また，喪服を着て陰鬱な表情をし，懐柔しようとする人に対して頑なな態度を崩そうとしないのは，王子ハムレットのふるまいである。さらに，一幕二場での The First Soliloquy[15]で直接敵であるクローディアスに怒りが向かわず，母親に対して不満を述べるハムレットと，マリガンではなく，ミルク売りの老婆を通して対決の姿勢を示すスティーブンの姿が重なり合ってくる。このようにこの挿話での対応関係は，スティーブンが王子ハムレットであり，マリガンが兄を殺しデンマーク王となったクローディアスとなるであろう。

第一挿話全体は，『ハムレット』一幕二場の状況と一致していると言えるかもしれない。『ハムレット』では，クローディアスの懐柔がアクションの中心で，ひたすら陰鬱にその反応に終始するハムレットの対応，場面最後で行なわれる The First Soliloquy とスティーブンのミルク売りに対する内的独白やマリガンから想起される異端者の列挙(1.651-665)などが，一致するのだ。

あるいは，作者により演じさせられていると言った方が正しいのかもしれない。〈1〉で考察してきたように，作者は語り手を通じて，マリガンには高貴なイメージが付与され，一方スティーブンにはそれと正反対のイメージが付与されていたのだ。小説というジャンルすべてがそうであるが，内的独白や本論では取り扱わなかったせりふのすべても，作者が語り手を使って引用させ，描写させたものである。

では，なぜ作者はこのように描写させたのだろうか。それは『肖像』の後パリへ行き，何もかも上手くいかずに打ちひしがれたスティーブン像を描き出すためであると言えるのではないだろうか。『肖像』の語りと比べてみれば一目瞭然である。『肖像』では常にスティーブンの視点から周りの状況が描かれ，描出話法で描かれる意識の流れも彼の自己主張として十分に役立っていた。そしてそれが作品の最後では，日記の形で読者に直接訴えかける文体へと高まったのである。

それに対して，冒頭でいきなりアクションの中心をマリガンに奪われているのである。なんという皮肉なのであろうか。マリガンの登場で挿話が始まるのは，スティーブンが置かれている苦境を効果的に描くためであると言える。

また，内的独白もその苦境を増大させる役割を担っている。ここは『ハムレット』と対比してみると，さらに興味深い。兄を殺害するという「親族殺し」を犯し，三幕三場で良心の呵責に襲われ，跪き祈るのはクローディアスであるが，『ユリシーズ』で「親族殺し」の良心の呵責に襲われるのは，スティーブンの方である。彼は信条のため，とりあえず祈ることさえできなかった。

さらに，〈3〉で検討したように彼は塔の持ち主(借り手)ではない。この塔をデンマーク王国に例えると，もともとその王位を得る権利があるのがマリガンで，スティーブンには王位継承の権利はない。ハムレットと重ね合わせられていながら，立場が逆転してしまっているのである。

これまで考察してきたことを考えると，この挿話の最後の "Usurper." (1.744)の意味も変わってくるのではないだろうか。表面上は，スティーブンが場面を去りながらマリガンを見て行なう内的独白であるが，"It is mine. I paid the rent." (1.631)の時と同じように，以前マリガンから言われた言葉であるという可能性もあるのではないだろうか。

ジョイスは，マリガンをスティーブンと対峙させて，語り手に前者を優位に描かせ，後者を絶望の淵へと追い込む役割をさせることによって，また内的独白によって，『肖像』とは打って変わった挫折して打ちひしがれたスティーブン像を巧みに表現している。スティーブンは，このような苦境から一日をスタートする。そのスティーブンが，第二，三，九挿話そしてブルームと合流した後どのように変化して描かれていくのだろうか。それは，別の稿で行ないたいと思う。

註

1）Joyce, James. *Ulysses* (London, The Bodley Head, 1986). この版をテキストとして使用した。以下，テキストからの引用箇所は（挿話番号．行数）のみで表す。

2）Van Caspel, Paul. *Bloomers on the Liffey* (Baltimore, John Hopkins University Press, 1986) p.24. [　　] は筆者。

3）*Oxford English Dictionary,* 2nd Edition on CD-Rom (Oxford, Oxford University Press, 1994).

4）Ellmann, Richard. Ulysses *on the Liffey* (Oxford, Oxford University Press, 1972) p.19.

5）*OED*，前出。

6）*OED*，前出。

7）Gifford, Don. Ulysses *Annotated,* Second edition (Berkeley, University of California Press, 1988) pp.12–13.

8）Kojima, Motohiro. "Stephen Dedalus' *Chewed Corpse and Agenbitten of Inwit*", 日本ジェイムズ・ジョイス協会，*Joycean Japan No.13* (Tokyo，日本ジェイムズ・ジョイス協会，2002) p. 37. [　　] は筆者。

9) Benstock, Bernard. "Telemachus" Ed. by Hart, Clive and Hayman, David, *James Joyce's* Ulysses *Critical Essays* (Berkeley, University of California Press, 1974) p.9.

10) Ibid. p.9.

11) Gifford, Don. 前出, p. 21。

12) Caspel, Paul Van. 前出, pp. 29－30。

13) Eglinton, John. *Anglo-Irish Essays* (Dublin, The Talbot Press,1917) p.137. [ ] は筆者。

14) Gilbert, Stuart. *James Joyce's Ulysses* (London, Faber and Faber, 1930).

15) Shakespeare, William. *Hamlet,* Arden Shakespeare Edition (Croatia, Methuen & co.Ltd,1982) Ⅰ. ii .129-159.

参考文献

Benstock, Bernard. "Telemachus" Ed. by Hart, Clive and Hayman, David, *James Joyce's* Ulysses Critical Essays (Berkeley, University of California Press, 1974).

Eglinton, John. *Anglo-Irish Essays* (Dublin, The Talbot Press, 1917).

Ellmann, Richard. Ulysses *on the Liffey* (Oxford, Oxford University Press, 1972).

Gifford, Don. Ulysses *Annotated,* Second edition (Berkeley, University of California Press, 1988).

Gilbert, Stuart. *James Joyce's Ulysses* (London, Faber and Faber, 1930).

Joyce, James. *Ulysses* (London, The Bodley Head, 1986).

Kojima, Motohiro. "Stephen Dedalus' *Chewed Corpse and Agenbitten of Inwit*", 日本ジェイムズ・ジョイス協会, *Joycean Japan No.13* (Tokyo, 日本ジェイムズ・ジョイス協会, 2002).

Oxford English Dictionary, 2nd Edition on CD-Rom (Oxford, Oxford University Press, 1994).

Shakespeare, William. *Hamlet,* Arden Shakespeare Edition (Croatia, Methuen & co. Ltd., 1982).

Van Caspel, Paul. *Bloomers on the Liffey* (Baltimore, John Hopkins University Press, 1986).